「Nagoya Linguistics（名古屋言語研究）」 10.18999/nagl.17.1
2023 Vol.17, pp.1-14

古代語複合動詞の現代語への継承について

阿部 裕（愛知教育大学）

要旨

〈動詞連用形＋動詞〉形の複合動詞が発達していることは現代日本語の特色だが、複合動詞は古代語から存在しており、特に中古和文作品には非常に多くの複合動詞が用いられていることが知られる。しかし、古代語の複合動詞が現代語にどの程度継承されているのか、継承にはどのような傾向・特徴があるのかといった点については明らかとなっていない。かような諸点についての見通しを得るため、古代語において複合動詞を構成しやすい動詞 20 語を取り上げ、それらを構成要素とする複合動詞の中に古代語と現代語に共通するものがどれだけ存在するのかを調査した。その結果、古代語において生産的に生み出された複合動詞の一部が現代まで継承され、現代語複合動詞語彙の構成要素となっていることが明らかとなった。その一方、複合動詞前項になりやすい動詞は古代語と現代語において大きな差異が見られないのに対し、後項になりやすい動詞では古代語と現代語に 2 つの差異が見られることが判明した。

1　はじめに

現代日本語における〈動詞連用形＋動詞〉形の複合動詞について、影山（2014）では以下の諸点が指摘されている。

・名詞＋動詞型の複合動詞が日本語では比較的少ないのに対し、動詞連用形＋動詞型の複合動詞は非常に生産的である
・動詞＋動詞型の複合体は東アジアから南アジア、そして中央アジアの一部にわたる地域的な言語類型であるとされてきたが、南アジアの複合動詞では前の動詞に接続形式（日本語の接続助詞テに当たる形式）が付くことや、中央アジアでも「動詞＋動詞」を直接つなぐ複合動詞は少ないことが報告されている。
・東アジアの中でも、日本語の動詞＋動詞型複合動詞は韓国語その他と比べて著しく生産的で多様性に富む。

以上より、〈動詞連用形＋動詞〉の複合動詞が発達していることは日本語の特色といえる。石井（2007）では現代語辞書類から計 2494 語の複合動詞を抽出していること、国立国語研究所が作成した「複合動詞レキシコン」https://vvlexicon.ninjal.ac.jp/に約 2700 語の複合動詞が収録されていることは、日本語における複合動詞の豊富さを示す証左といえよう。

日本語の特色たる複合動詞についてはさまざまな面からの研究が行われているが、影山（2014）は解明すべき「複合動詞の謎」として「なぜ日本語はこのように複合動詞が豊富なのか、いつの時代からそうなったのか、また、それが方言（特に琉球語）にどう反映され、第一・第二言語習得にどう影響するのか」（p.13）といった点を挙げる。この中で本稿が注目するのは「なぜ日本語はこのように複合動詞が豊富なのか」「いつの時代からそうなったのか」という点、すなわち複合動詞史である。複合動詞史の研究は金田一（1953）以

来蓄積されてきたが、その多くは前項と後項の結びつき方など複合動詞の内部構造の歴史的変遷について検討するものであった。一方、複合動詞の語彙体系の歴史的変遷を大局的な観点から扱った研究は少なく、現代語の複合動詞語彙が歴史的にどのように成立してきたのかを追う研究はこれまでほとんど行われてきていないと思われる。

影山（同）の挙げる「謎」のうち、いつの時代から複合動詞が豊富になったのかという点については、古代（特に平安時代）と考えておけば大きく外れてはいないだろう。上代（奈良時代）に関しては、資料的制約もあって複合動詞がどの程度存在していたのか定かではないが、平安時代の王朝古典にきわめて多くの複合動詞が見られることはよく知られる。〈動詞連用形＋動詞〉形の複合動詞を多用することは古代語から続く日本語の伝統的手法といえる。その一方、現代語の複合動詞語彙がどれだけ古代語の影響を受けているのかについて明確なことは分かっていない。古代語の複合動詞がどの程度、現代語に継承されているのかという点を明らかにしなければ、日本語はいつの時代から複合動詞が豊富になったのかという謎が十分に解明されたとは言えない。

そこで本稿では、この謎の解明にむけた端緒として、平安時代の複合動詞と現代語の複合動詞のリストを比較し、一致するものがどの程度あるのかを探る。これにより、古代語の複合動詞が現代語にどの程度継承されているのか、その継承にはどのような傾向・特徴があるのかといった諸点への見通しが得られると考える。

2　古代語と現代語の複合動詞構造

古代語と現代語の複合動詞を比較するに際して、両時代の複合動詞の内部構造の違いには留意しておく必要がある。一般的に〈動詞連用形＋動詞〉が複合動詞と認定されるには、前項と後項が意味と形態の両面から一体化していなければならない。意味面では、前項動詞と後項動詞の単純な連続では生じないような独自の意味用法を獲得しているかどうかが重要である。形態面では、前項と後項のアクセントが保持されず高い部分が 1 つになっていること、前項後項間に助詞などを挿入できないことなどが主な判断基準となる。したがって、「公園へ行き遊ぶ」のようにテ形（行って遊ぶ）で言い換え可能なものは複合動詞とは見なされない。しかしこれらの点について、古代語は現代語と異なるとされる。

古代語においては、2 つの独立した動作であっても〈動詞連用形＋動詞〉で表されることが少なくなかったとされる。かようなものは複合動詞ではなく、臨時的な動詞の連続である。また、意味的には複合動詞と考えられそうなものであっても、形態的な緊密度は現代語の複合動詞よりも弱いとされる。これは、古代語では複合動詞の前項後項間に係助詞などが挿入される例が見られることなどによる[1]。

以上より、古代語では個々の〈動詞連用形＋動詞〉が複合動詞であるのかについて慎重に検討すべきだが、その判断は容易でなく、いずれとも判断しがたいものも少なくない。そのため本稿では便宜的に、下記索引に掲載されている項目はすべて複合動詞と見なす。

3　利用する複合動詞リスト

古代語と現代語の複合動詞がどの程度一致するのか、おおよその傾向を把握するため、

[1] 古代語複合動詞の特徴について、詳細は青木（2013）を参照されたい。

以下の複合動詞リストを利用して両時代の複合動詞を対照する。

東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明（2003）『平安時代複合動詞索引』清文堂

平安時代（院政期を含む）に成立（もしくは執筆・編集が開始）したと一般に認められている文献（主に仮名文学作品）の複合動詞を網羅した索引。複合動詞の採集は公刊された各種索引に依拠している。平安時代の複合動詞の全体像を把握するに適した索引である。

石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房

本書の資料 1「「既成の複合動詞」造語成分の連接表」は、現代語の辞書類など（『学研国語大辞典（初版）』『新明解国語辞典（第三版）』『岩波国語辞典（第二版）』『国立国語研究所資料集 7　動詞・形容詞問題語用例集』）から採集した複合動詞を網羅している。

4　調査方法

両時代のすべての複合動詞を調査することが理想だが、対象が膨大になるため、今回は複合動詞造語成分となりやすい動詞を構成要素とする複合動詞に絞る。

東辻ほか（2003）の「構成複合動詞数一覧」（p.458）には、構成する複合動詞数の多い動詞上位 50 位が掲載されている。これを参照して、複合動詞構成要素となりやすい動詞の上位 20 語を選定し、それを調査対象とする。その際、その動詞が前項となる複合動詞と後項となる複合動詞を区別する。

続いて、調査対象となった動詞を構成要素とする複合動詞が現代語にどれだけ存在するのかを、石井（2007）p.363 以降の資料 1「「既成の複合動詞」造語成分の連接表」を参照して調査する。そのうえで、調査対象のうち古代語と現代語に共通する複合動詞を示し、後の表 3 では古代語・現代語それぞれの一致率も添える。

なお、動詞が複合動詞の造語成分となる際、前項にも後項にも同程度になるとは限らず、いずれかに偏るものが多い。以下、前項になりやすく後項になりにくい動詞を「前項中心動詞」、後項になりやすく前項になりにくい動詞を「後項中心動詞」、前項にも後項にも同程度になる動詞を「両項動詞」と呼称する。

5　調査結果

5.1　古代語における上位 20 語

古代語において複合動詞構成要素となりやすい動詞上位 20 語（以下、上位 20 語）は「打つ」「思ふ」「合ふ」「出づ」「果つ」「言ふ」「取る」「行く」「居る」「見る」「置く」「引く」「立つ（四段）」「来」「渡る」「入（い）る」「差す」「立つ（下二段）」「遣る」「聞く」であった[2]。それぞれの語数を表 1 として示す[3]。

---

[2] 「打つ」「撃つ」「討つ」、「合ふ」「会ふ」「相ふ」、「差す」「指す」「刺す」のように意味によって漢字表記が異なるものは、1 つの表記で代表する。現代語についても同様とする。

[3] 東辻ほか（同）では 3 つの動詞が結合したもの（「打ち解け見る」など）、4 つの動詞が結合したもの（「打ち解け見馴る」など）まで掲載しているが、複合動詞は 2 語の結合を基本とし、3 語あるいは 4 語のものも 2 語が結合した複合動詞にさらに別の動詞が結合したものと見ることができるため、本稿では 2 語が結合した複合動詞のみを調査対象とする。また、同索引では「おぼす」、「めす」、「おはす」「まうす」が上位に入っているが、これらは敬語動詞であり現代語では生産的に用いられないため、今回の考察からは除外する。同様に、「持ちて」が接頭辞化したと考えられ

【表 1】古代語における複合動詞構成要素上位 20 語

	見出し語	前項	後項	小計		見出し語	前項	後項	小計
①	打つ（四段活用）	431	9	440	⑪	置く（四段活用）	30	172	202
②	思ふ（四段活用）	288	78	366	⑫	引く（四段活用）	192	8	200
③	合ふ（四段活用）	75	193	268	⑬	立つ（四段活用）	95	101	196
④	出づ（下二段活用）	45	218	263	⑭	来（カ行変格活用）	25	143	168
⑤	果つ（下二段活用）	1	259	260	⑮	渡る（四段活用）	27	140	167
⑥	言ふ（四段活用）	205	50	255	⑯	入る（四段活用）	25	114	139
⑦	取る（四段活用）	135	90	225	⑰	差す（四段活用）	129	7	136
⑧	行く（四段活用）	57	159	216	⑱	立つ（下二段活用）	36	98	134
⑧	居る（上一段活用）	39	177	216	⑲	遣る（四段活用）	13	119	132
⑩	見る（上一段活用）	154	58	212	⑳	聞く（四段活用）	105	18	123

「打つ」「思ふ」「言ふ」「見る」「引く」「差す」「聞く」は前項中心動詞、「合ふ」「出づ」「果つ」「行く」「居る」「置く」「来」「渡る」「入る」「立つ（下二段）」「遣る」は後項中心動詞、「取る」「立つ（四段）」は両項動詞である。

前項中心動詞となる動詞は「差す」を除いて石井（2007）で主体動作（他）動詞に分類されるものであり（「差す」のみ再帰動詞）、後項中心動詞は「居る」「置く」「遣る」「立つ（下二段）」を除いて主体変化動詞に分類される（「居る」は状態動詞、「置く」「遣る」は主体動作（他）動詞、「立つ（下二段）」は主体動作客体変化動詞）。石井（同）は現代語において主体の動作を表す動詞が前項に、主体ないし客体の変化を表しうる動詞が後項に多く分布することを指摘している（p.36）が、古代語にも同様の傾向が見て取れる。

5.2　上位 20 語の現代語における様相

【表 2】上位 20 語の現代語における複合動詞構成数

見出し語	前項	後項	小計	見出し語	前項	後項	小計
打つ（五段活用）	65	4	69	置く（五段活用）	2	8	10
思う（五段活用）	37	0	37	引く（五段活用）	71	2	73
合う（五段活用）	0	67	67	立つ（五段活用）	37	29	66
出る（下一段活用）	17	20	37	来る（カ行変格活用）	2	1	3
果てる（下一段活用）	0	13	13	渡る（五段活用）	2	16	18
言う（五段活用）	73	0	73	入る（五段活用）	7	30	37
取る（五段活用）	84	36	120	差す（五段活用）	20	0	20
行く（五段活用）	18	5	23	立てる（下一段活用）	11	44	55
居る（上一段活用）	14	0	14	遣る（五段活用）	9	8	17
見る（上一段活用）	79	5	84	聞く（五段活用）	35	2	37

古代語複合動詞の現代語への継承について知るために、古代語の上位 20 語を構成要素とする複合動詞の現代語における様相を把握する必要がある。石井（2007）により、上位

る「もて」も除外する。

20 語を構成要素とする複合動詞数を表 2 としてまとめた。（語形は現代語に改めた）

全体的な語数は大きく減少しているものの、古代語において前項中心動詞であった「打つ」「思う」「言う」「見る」「引く」「差す」「聞く」がいずれも前項中心である点、「取る」「立つ（五段）」が両項的である点など、共通点が多い。一方、古代語において後項中心動詞であった動詞には差異が目立つものが見られる。「合う」「果てる」「置く」「渡る」「入る」「立てる」は現代語においても後項中心だが、「出る」「遣る」は拮抗しており両項動詞といえるし、「行く」「居る」は前項中心となっている。「来る」は複合動詞を構成することが非常に少なく、いずれが中心とも言い難い。

5.3　古代語と現代語に共通する複合動詞

上位 20 語を構成要素とする複合動詞のうち、古代語と現代語に共通するものを動詞ごとに示す（現代語の語形による）。その際、その動詞が前項となるものと後項となるものに分ける。3 節に挙げた両リストに共通するものは一律に掲載しているため、以下に挙げる中には現代語においてあまり用いられないものも含まれる点、留意されたい。

【打つ】

・前項となるもの

打ち合う・打ち上げる・打ち当てる・打ち合わせる・打ち入る・打ち落とす・打ち折る・打ち下ろす・打ち返す・打ち掛ける・打ち重なる・打ち勝つ・打ち切る・打ち砕く・打ち消す・打ち込める・打ち殺す・打ち萎れる・打ち据える・打ち過ぎる・打ち捨てる・打ち絶える・打ち倒す・打ち出す・打ち立てる・打ち違える・打ち付ける・打ち続く・打ち連れる・打ち解ける・打ち取る・打ち直す・打ち眺める・打ち靡く・打ち抜く・打ち払う・打ち伏す・打ち振る・打ち任す・打ち守る・打ち見る・打ち破る・打ち遣る・打ち寄せる・打ち忘れる・打ち割る

・後項となるもの

投げ打つ

【思う】

・前項となるもの

思い上がる・思い余る・思い合わせる・思い至る・思い入る・思い入れる・思い及ぶ・思い返す・思い固める・思い切る・思い込む・思い定める・思い知る・思い過ごす・思い出す・思い立つ・思い違える・思い付く・思い詰める・思いとどまる・思い止まる・思い直す・思い悩む・思い残す・思い惑う・思い回す・思い巡らす・思い設ける・思い遣る・思い煩う

・後項となるもの

なし

【合う】[4]
・前項となるもの
なし

・後項となるもの
有り合う・居合う・言い合う・打ち合う・押し合う・語り合う・食い合う・茂り合う・知り合う・責め合う・出合う・取り合う・似合う・引き合う・ひしめき合う・見合う・向かい合う・巡り合う・持ち合う・寄り合う・行き合う

【出る（出づ)】
・前項となるもの
出会う・出歩く

・後項となるもの
浮かび出る・浮き出る・進み出る・滑り出る・飛び出る・名乗り出る・抜き出る・抜け出る・這い出る・吹き出る・申し出る・萌え出る・湧き出る

【果てる】
・前項となるもの
なし

・後項となるもの
荒れ果てる・変わり果てる・消え果てる・朽ち果てる・暮れ果てる・死に果てる・絶え果てる・尽き果てる・成り果てる・弱り果てる

【言う】
・前項となるもの
言い合う・言い当てる・言い誤る・言い争う・言い表す・言い合わせる・言い入れる・言い置く・言い送る・言い落とす・言い替える・言い返す・言い掛ける・言い交わす・言い聞かせる・言い切る・言い消す[5]・言い拵える・言い過ごす・言い捨てる・言い損う・言い出す・言い立てる・言い散らす・言い継ぐ・言い尽くす・言い付ける・言い伝える・言い直す・言い成す・言い逃れる・言い残す・言い罵る・言い放つ・言い囃す・言い開く・言い紛らわす・言い漏らす・言い破る・言い遣る・言い寄る・言い分ける・言い渡す

・後項となるもの
なし

[4] 石井（2007）は「合う」と「会う」を別項目とするが、本来的には同語と考え、統一した。
[5] 「言い消す」は古代語では「言ひ消つ」であり、厳密には別語だが、意味と語形がほぼ同じであるためここでは同語扱いとした。

【取る】
・前項となるもの
取り合う・取り上げる・取り扱う・取り集める・取り誤る・取り合わせる・取り入る・取り入れる・取り置く・取り行う・取り落とす・取り替える・取り返す・取り掛かる・取り交わす・取り組む・取り込む・取り込める・取り殺す・取り下げる・取り去る・取り縋る・取り捨てる・取り出す・取り立てる・取り違える・取り散らす・取り付く・取り継ぐ・取り繕う・取り付ける・取り続く・取り止める・取り直す・取り成す・取り退ける・取り残す・取り外す・取り放す・取り払う・取り広げる・取り賄う・取り混ぜる・取り持つ・取り寄せる・取り分ける・取り忘れる

・後項となるもの
受け取る・打ち取る・写し取る・奪い取る・買い取る・書き取る・絡め取る・聞き取る・切り取る・抱き取る・掴み取る・抜き取る・剥ぎ取る・引き取る・巻き取る・見取る・迎え取る・召し取る・読み取る

【行く】
・前項となるもの
行き合う・行き掛かる・行き通う・行き暮らす・行き暮れる・行き過ぎる・行き違う・行き付く・行き止まる・行き悩む

・後項となるもの
暮れ行く・過ぎ行く・立ち行く・成り行く・更け行く

【居る】
・前項となるもの
居合う・居静まる・居すくむ・居付く・居直る・居並ぶ・居眠る

・後項となるもの
なし

【見る】
・前項となるもの
見合う・見飽きる・見上げる・見表す・見合わせる・見入る・見失う・見送る・見落とす・見下ろす・見変える・見返す・見返る・見掛ける・見交わす・見下す・見比べる・見越す・見定める・見知る・見過ごす・見捨てる・見出す・見立てる・見尽くす・見付ける・見詰める・見積もる・見通す・見咎める・見取る・見直す・見成す・見習う・見慣れる・見残す・見放す・見張る・見開く・見守る・見回す・見向く・見巡る・見遣る・見忘れる・見渡す

・後項となるもの

仰ぎ見る・打ち見る・望み見る

【置く】
・前項となるもの
置き替える

・後項となるもの
言い置く・聞き置く・据え置く・捨て置く・契り置く・止め置く・取り置く

【引く】
・前項となるもの
引き合う・引き上げる・引き当てる・引き合わせる・引き入れる・引き起こす・引き下ろす・引き替える・引き掛かる[6]・引き掛ける・引き括る・引き比べる・引き込める・引き下げる・引き据える・引き倒す・引き出す・引き立てる・引きちぎる・引き散らかす・引き継ぐ・引き繕う・引き付ける・引き続く・引き連れる・引き止める・引き捕らえる・引き取る・引き直す・引き抜く・引き退ける・引き剥ぐ・引き外す・引き放つ・引き張る・引き曲げる・引き回す・引き破る・引き寄せる・引き分ける・引き渡す

・後項となるもの
なし

【立つ】
・前項となるもの
立ち上がる・立ち入る・立ち遅れる・立ち返る・立ちかかる・立ち替わる・立ち込む・立ち込める・立ち去る・立ち騒ぐ・立ちすくむ・立ち添う・立ち違う・立ち尽くす・立ち止まる・立ち直る・立ち並ぶ・立ち退く・立ち上る・立ち塞がる・立ち勝る・立ち交じる・立ち迷う・立ち向かう・立ち行く・立ち寄る・立ち別れる

・後項となるもの
浮き立つ・生い立つ・思い立つ・下り立つ・騒ぎ立つ・突き立つ・連れ立つ・飛び立つ・成り立つ・舞い立つ・群れ立つ・燃え立つ

【来る】
・前項となるもの
来掛かる

[6] 「引き掛かる」「引き張る」等は通常「引っ掛かる」「引っ張る」のような音便形で用いられる。音便形「引っ―」を原型「引き―」と同様に扱ってよいかについては検討の余地があるが、石井（2007）では両者を同一視しているとみられること、複合動詞レキシコンにおいても「引っ―」を「引き―」の音変化としていることから、ここでは両者を区別せずに扱う。

・後項となるもの
寄り来る

【渡る】
・前項となるもの
渡り合う・渡り歩く

・後項となるもの
明け渡る・輝き渡る・冴え渡る・差し渡る・澄み渡る・照り渡る・飛び渡る・鳴り渡る・晴れ渡る・吹き渡る・待ち渡る・見え渡る

【入(い)る】
・前項となるもの
入り替わる・入り込む・入り交じる・入り乱れる

・後項となるもの
打ち入る・押し入る・落ち入る・思い入る・消え入る・聞き入る・食い入る・差し入る・忍び入る・滑り入る・攻め入る・絶え入る・立ち入る・取り入る・眺め入る・泣き入る・寝入る・引き入る・見入る

【差す】
・前項となるもの
差し上げる・差し当てる・差し入れる・差し替える・差し掛ける・差しかざす・差し交わす・差し切る・差し込む・差し殺す・差し出す・差し違える・差し付ける・差し通す・差し延べる・差し挟む

・後項となるもの
なし

【立てる】
・前項となるもの
立て替える・立て切る・立て込める・立て回す

・後項となるもの
言い立てる・打ち立てる・追い立てる・押し立てる・書き立てる・掻き立てる・飾り立てる・数え立てる・駆り立てる・口説き立てる・し立てる・攻め立てる・突き立てる・作り立てる・取り立てる・並べ立てる・塗り立てる・引き立てる・踏み立てる・振り立てる・誉め立てる・見立てる・申し立てる・呼び立てる

【遣る】

・前項となるもの
遣り返す・遣り過ごす

・後項となるもの
言い遣る・打ち遣る・追い遣る・押し遣る・思い遣る・眺め遣る・投げ遣る・見遣る

【聞く】
・前項となるもの
聞き誤る・聞き合わせる・聞き入る・聞き入れる・聞き置く・聞き落とす・聞き及ぶ・聞き知る・聞き過ごす・聞き捨てる・聞き継ぐ・聞き付ける・聞き伝える・聞き咎める・聞き取る・聞き直す・聞き慣れる・聞き漏らす・聞き分ける

・後項となるもの
伝え聞く

5.4　まとめ

一致率をまとめると、表 3 のようになる。表 3 では古代語における前項中心動詞、後項中心動詞、両項動詞に分けて記載している。

表の記載事項を前項中心動詞「打つ」を例に見ていこう。古代語において「打つ」が前項となる複合動詞は 431 語、後項となる複合動詞は 9 語である。一方、現代語において「打つ」が前項となる複合動詞は 65 語、後項となる複合動詞は 4 語である。このうち、両時代に共通するものは「打つ」が前項となるもので 46 語、後項となるもので 1 語であった。それが 5.3 節に載せた複合動詞のリストである。さて、この 46 語という数は、古代語において「打つ」が前項となる複合動詞 431 語の 11%に当たり、現代語において「打つ」が前項となる複合動詞 65 語の 71%に当たる。単純に考えれば、古代語の「打つ」を前項とする複合動詞の 90%近くは現代語に至るまでに消滅したが約 10%は現代語まで残り、それが現代語の「打つ」を前項とする複合動詞の 70%以上を占めるということになる。

前項中心動詞が前項となる複合動詞の古代語における一致率は「見る」の 30%が最大であり、その他は 10%から 20%程度である。一方、現代語における一致率は「聞く」の 54%が最低であり、80%を超えるものもある。これらの動詞を前項とする複合動詞は古代語から現代語にかけて大きく減少したが、現代語において用いられているものの多くは古代語と共通していることが分かる。なお、前項中心動詞が後項となるものは古代語においても現代語においても少なく、この点は古代語と現代語に共通する傾向といえる。

続いて、後項中心動詞について見ていこう。後項中心動詞が後項となる複合動詞の古代語における一致率は最大で「立つ（下二段）」の 24%だが、10%に満たないものも多く、「居る」「来」のように全く（あるいはほとんど）一致しないものも見られる。この点は前項中心動詞との大きな違いである。現代語における一致率に目を向けると、「合ふ」（合う）以外のすべてにおいて 50%を超えている。しかし、前項中心動詞と比べて全体的に母数が少ないことには留意したい。特に、「行く」「来」を後項とする複合動詞は極めて少なく、「居る」を後項とするものに至っては 1 例も見られない。

【表 3】一致率まとめ

	古代語		現代語	
前項中心	前項	後項	前項	後項
打つ	11%（46/431）	11%（1/9）	71%（46/65）	25%（1/4）
思ふ	10%（30/288）	0%（0/78）	81%（30/37）	
言ふ	21%（43/205）	0%（0/50）	59%（43/73）	
見る	30%（46/154）	5%（3/58）	58%（46/79）	60%（3/5）
引く	21%（41/192）	0%（0/8）	58%（41/71）	0%（0/2）
差す	12%（16/129）	0%（0/7）	80%（16/20）	
聞く	18%（19/105）	6%（1/18）	54%（19/35）	50%（1/2）
小計	16%（241/1505）	2%（5/228）	63%（241/380）	38%（5/13）
合計	14%（246/1732）		63%（246/393）	
後項中心	前項	後項	前項	後項
合ふ	0%（0/75）	11%（21/193）		30%（21/71）
出づ	4%（2/45）	6%（13/218）	12%（2/17）	65%（13/20）
果つ	0%（0/1）	4%（10/259）		77%（10/13）
行く	18%（10/57）	3%（5/159）	56%（10/18）	100%（5/5）
居る	18%（7/39）	0%（0/177）	50%（7/14）	
置く	3%（1/30）	4%（7/172）	50%（1/2）	88%（7/8）
来	4%（1/25）	1%（1/143）	50%（1/2）	100%（1/1）
渡る	7%（2/27）	9%（12/140）	100%（2/2）	75%（12/16）
入る	16%（4/25）	17%（19/114）	57%（4/7）	63%（19/30）
立つ（下二）	11%（4/36）	24%（24/98）	36%（4/11）	55%（24/44）
遣る	15%（2/13）	7%（8/119）	22%（2/9）	100%（8/8）
小計	9%（33/373）	7%（120/1792）	40%（33/82）	56%（120/216）
合計	7%（153/2165）		51%（153/298）	
両項	前項	後項	前項	後項
取る	35%（47/135）	21%（19/90）	56%（47/84）	53%（19/36）
立つ（四段）	28%（27/95）	12%（12/101）	73%（27/37）	41%（12/29）
小計	32%（74/230）	16%（31/191）	61%（74/121）	48%（31/65）
合計	25%（105/421）		56%（105/186）	
総計	12%（504/4318）		57%（504/877）	

後項中心動詞が前項となるものは古代語では少ないが、現代語においては「合ふ」（合う）「入る」「立つ」（立てる）のように前項となる例が少ない（あるいは存在しない）ものもあれば、「行く」「居る」のように前項となる例の方が多い（あるいは前項にしかならない）ものも存在する。この点については後に触れる。

両項動詞「取る」「立つ」は、古代語、現代語いずれにおいても比較的高い一致率である。これらも母数は大きく減少しているものの、少なからず現代語まで残っているといえよう。

5.5 考察

前項中心動詞、両項動詞を構成要素とする複合動詞は、これまで見たように、古代語から現代語にかけて大きくその数を減らしている。しかし、それらを構成要素とする複合動詞は現代語にも少なからず見られることから、それらの動詞が複合動詞を構成しにくくなったわけではない。後項中心動詞の一部も同様である。古代語において多数創出された複合動詞には臨時的なものも含まれており、その歴史的耐久性は低かったため、基本的に後世まで残りにくかったものと考えられる。

では、現代まで生き延びた複合動詞にはどのような特徴があるのか。古代語と現代語に共通する複合動詞の中には、古代語の時点で意味の慣習化・不透明化が進んでいたものが認められる。(以下用例は岩波書店の新日本古典文学大系により、一部表記を改めた)

(1) 打ち解けぬ御ありさまなどのけしきことなるに (源氏・夕顔)

(2) あるじのむすめども多かりと聞き給て、はかなきついでに言ひ寄りて侍しを (源氏・帚木)

(3) 殿の事取り行ふべき上下定めおかせ給ふ。 (源氏・須磨)

(1)「打ち解く」は〈心を許す〉、(2)「言ひ寄る」は〈求愛を目的として近づく〉、(3)「取り行ふ」は〈行事などを実施する〉といった意で用いられており、現代語とほぼ同意である。いずれも前項動詞と後項動詞の単純な連続では生じない慣習的な意味を獲得しており、かような複合動詞は消えにくかったと推測される。

一方、古代語においては意味の慣習化が見られないにもかかわらず、現代語に残っている複合動詞も存在する。

(4) 宮も居直り給て、御物語し給。 (源氏・若菜上)

(5) かう忍び給ふ御仲らひのことなれど、おのづから人のをかしきことに語り伝へつつつぎつぎに聞き漏らしつつ、ありがたき世語りにぞささめきける。 (源氏・真木柱)

(4)「居直る」は「座りなおす」という意味で用いられているが、現代語の「居直る」は立場の悪くなった人間が急に強気な態度に出ることを意味することが多い。(5)「聞き漏らす」は聞いた話を他人に漏らす意で用いられているが、現代語では主に話の内容の一部を聞き逃す意で用いられる。これらは歴史的に意味の慣習化が起こったものと見られる。

このほか、「打ち思ふ」「思ひ置く」のように古代語では多いが現代語ではほぼ使用されない複合動詞も存在する。古代語から現代語に継承された複合動詞、継承されなかった複合動詞にはそれぞれどのような特徴があるのか、今後さらに追究していく必要があろう。

現代語まで継承されなかった複合動詞は、後項中心動詞に顕著である。表 1、2 から分かるように、古代語の「行く」「居る」は後項として高い生産性を持ち、数多くの複合動詞を産出していたが、現代語ではいずれも前項中心動詞となっており、これらを後項とする複合動詞はわずかである。同様に、「来」も後項中心動詞であったが、現代語では複合動詞構成要素になる例が極めて少ない。「行く」「居る」「来」はいずれも現代語に至るまでに複合動詞構成要素としての機能を失ったといえる。その要因として考えられるのは、テ形の発達である。これらのテ形「テイク」「テイル」「テクル」は現代語において非常に生産的であり、その発達と定着が複合動詞の継承に影響を及ぼした可能性がある。複合動詞の継承については、このような文法変化による影響も踏まえて検討していく必要がある。

6　現代語の上位 20 語

古代語複合動詞の現代語への継承が本稿の主なテーマであるため、ここまでは古代語における上位 20 語に注目してきたが、ここでは現代語における複合動詞構成要素上位 20 語についても見ておきたい。以下の表は、石井（2007）p.31 をもとに作成した、現代語における複合動詞構成数上位 20 語の動詞をまとめたものである[7]。古代語の上位 20 語と共通するものには網掛けした。また、（）内には古代語と共通する複合動詞の数を示した。

【表 4】現代語における上位 20 語

	見出し語	前項	後項	小計		見出し語	前項	後項	小計
①	込む	3（0）	150（5）	153（5）	⑪	打つ	65（46）	4（1）	69（47）
②	取る	84（47）	36（19）	120（66）	⑫	立つ	37（27）	29（12）	66（39）
③	出す	6（0）	94（29）	100（29）	⑬	立てる	11（4）	44（24）	55（28）
④	付ける	12（2）	85（31）	97（33）	⑭	付く	5（1）	47（19）	52（20）
⑤	見る	79（46）	5（3）	84（49）	⑮	押す	48（26）	0（0）	48（26）
⑤	上げる	0（0）	84（25）	84（25）	⑯	上がる	1（0）	46（12）	47（12）
⑦	切る	38（12）	43（9）	81（21）	⑯	掛ける	9（5）	38（16）	47（21）
⑧	言う	73（43）	0（0）	73（43）	⑱	合わせる	1（0）	43（14）	44（14）
⑧	引く	71（41）	2（0）	73（41）	⑲	書く	43（23）	0（0）	43（23）
⑩	合う	0（0）	71（21）	71（21）	⑳	突く	42（13）	0（0）	42（13）

古代語の上位 20 語と共通するものは、前項中心動詞「見る」「言う」「引く」「打つ」、後項中心動詞「合う」「立てる」、両項動詞「取る」「立つ」の計 8 語である。

古代語上位 20 語における前項中心動詞の多くが現代語上位 20 語にも含まれている。また、古代語上位 20 語に入っていない「押す」「書く」「突く」はいずれも古代語において前項として多くの複合動詞を構成している（「押す」102 語、「書く」92 語、「突く」45 語）。複合動詞前項となりやすい動詞では、古代語と現代語で顕著な差異は見られない。

一方後項中心動詞では、現代語の上位 20 語のうち古代語の上位 20 語と共通するのは 2 語のみである。ただし、共通しない動詞の多くは古代語において複合動詞後項になりにくいとまでは言えず、「出だす」88 語、「付く（下二段）」69 語、「上ぐ（下二段）」56 語、「付く（四段）」73 語、「上がる」23 語、「掛く（下二段）」83 語、「合わす（下二段）」55 語と多くの複合動詞を構成している。例外的なのは「込む」である。「込む」は現代語において後項として最も多くの複合動詞を構成するが、古代語においては「込む」が後項となる複合動詞は 10 語のみである。「込む」を後項とする複合動詞は古代語から現代語にかけて急激に数を増やしたことになり、注目される。

両項動詞については、「取る」「立つ」は両時代に共通して上位 20 語に入っている。現代語の上位 20 語中では「切る」も両項動詞といえるが、古代語においても前項として 31 語、後項として 21 語の複合動詞に用いられており、古くから両項動詞であったことが分かる。

現代語の上位 20 語のうち、「込む」は特異な例として注目されるが、その他は古代語においても多くの複合動詞を構成しており、特筆すべき差異は認められない。

[7] 石井（2007）では「合う」を含む複合動詞は 67 語となっているが、ここでは「会う」4 語も併せて 71 語としている。

7　おわりに

古代語では極めて多くの複合動詞が創出され、王朝古典作品を彩ったが、そのような複合動詞の歴史的耐久性は低く、多くは後に消滅してしまう。しかし、その一部は現代まで継承され、現代語複合動詞語彙の重要な一部分となっている。このことは前項中心動詞を前項とする複合動詞によく現れている。古代語において数多く産出された複合動詞の一部は現代語まで継承され、現代語複合動詞の原資になっていることが分かる。

一方、後項中心動詞では古代語と現代語に 2 つの大きな差異が認められた。その 1 つが「行く」「居る」「来」である。これらは古代語において多くの複合動詞の後項となったが、現代語では複合動詞後項となることが極めて少ない。これにはテイル形の発達が影響していると推測される。2 つ目は、「込む」のように古代語ではあまり複合動詞を構成しない動詞が現代語では非常に多くの複合動詞を構成する例が見られたことである。「～込む」には「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」の 2 タイプがあり（影山 2013）、かような特徴が語数の増加に関与している可能性がある。現代語複合動詞体系の成立について明らかにするためには、古代語複合動詞と現代語複合動詞の差異が歴史的にどのように生まれてきたのかについて検討していく必要がある。

今回利用した古代語の索引は中古和文語を対象としたものであるため、訓点資料などは調査範囲となっていない。複合動詞の使用には位相による差がある可能性もあり、和文以外の資料も調査する必要がある。また利用したリストに収載されている複合動詞を一律に対象としたため、現代語においてほとんど使用されていない複合動詞も調査結果に含まれることとなった。本稿の調査結果はあくまで全体的な見通しを得たに過ぎないものであり、複合動詞の歴史的継承について精確に描くためには、個別語ごとの詳細な調査が必要となる。その際には、コーパスなども利用しながら、両時代の複合動詞使用の実態に即した調査を行いたい。今後の課題である。

参考文献

青木博史（2013）「複合動詞の歴史的変化」影山太郎編『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて』ひつじ書房 pp.215-241

石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房

影山太郎（2013）「語彙的複合動詞の新体系―その理論的・応用的意味合い―」影山太郎編『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて』ひつじ書房 pp.3-46

影山太郎（2014）「日本語複合動詞の言語類型論的意義」『国語研プロジェクトレビュー』5-1 pp.8-18

金田一春彦（1953）「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂

東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明（2003）『平安時代複合動詞索引』清文堂

付記　本稿は、名古屋大学国語国文学会令和元年度春季大会シンポジウム「発信する古代日本語研究」で行った口頭発表の内容に加筆・修正を加えたものである。発表に際してご意見・ご指導を賜った方々に深く御礼申し上げる。